

Afoot in England における W. H. Hudson のエッセイ

W. H. Hudson's Essays in *Afoot in England*

佐藤 幸正

Yukimasa Satoh

序

このエッセイ集は1909年に公刊され、全25章から成る。このうち、半数近い12章は既に *Speaker* や *Saturday Review* 等に発表されたものである。1901年、年金 (Civil List Pension) を得ることになった作者は、以後経済的にも、また精神的にも、ある程度の余裕ができたと思え、南部や西部の諸州を始め、しばしば地方へ出かけている。そしてその土地の人々や風物に接して得た印象を書き記したのが本書である。目的地を訪れる場合、彼は予めガイド・ブックによって予備知識を得るようなことはしなかった。その地についての、あるいはそのの住民についての知識を得ることが主眼ではないからである。彼の場合は、その地で偶然に発見される喜びや幸せを、あるいは想い出に残るような風景を味わうために出かけた。従って、その対象の与える印象が強ければ強いほど、心にいつまでも残ることになる。そのような印象はまた、後年において、再現を可能にすることになる。こうして彼は心の赴くままに出かけ、再現を可能にしてくれるような、未知の喜びを発見しようとする。この喜びを、彼は本書において、読者にも分ち与えようとしたのである。

作者が訪問先で実物を見ようとする意図については、もう少し説明する必要があるであろう。われわれはガイド・ブックによって、あるいは写真や絵ハガキによって、目的地を想像することは可能である。しかしながら作者は現地で実物を見ることを最優先する。本物を見るということは、媒体を通して見る場合と異なり、その時の雰囲気や様相等の周囲の自然条件をも、ありのままに、しかも直接に観察できることを意味する。対象を直接に観察することで、彼は時と共に移ろいゆく、自然の微妙な変化をも看取しようとしたのである。

次に目的地の選択に付言すれば、作者の場合、観光地や名所旧蹟を避ける傾向がある。多くの場合、人の群がる場所を避けて、地方の小村や、その小さな教会、あるいは河川や、原野へ歩を運んだ。このような地方の、

しかもはや忘れ去られた場所や人々との交流を通じて、彼は人生の悲喜劇を再現したり、人間性の回復を想起させるのである。以下、このエッセイ集を通じて彼がどこを訪れ、どのような人々と交流し、またどのような場面を展開してくれるのか、見ていきたい。

I 村の精神を有する村人

作者がある夏の夕暮、デヴォン及びコーンウォール両州の境界線を通る Tamar 川を、左手に見下ろしながら下っていると、やがて向う岸に2〜3軒から成る農家、小さな古い教会、そして馬を川に乗り入れる若者の姿を目にする。間もなく、農家の主婦らしき人が家から出て来て、馬に川水を飲ませている若者と、何やら会話を交わすのである。主婦らしきその人は若者に夕食を告げに、川辺までやってきたのであろう。暮れゆく自然を背景に、残照を浴びた2人の人物を想像する時、一幅の情景画を思わせるものがある。会話が済むと、主婦らしき人は家に戻ってゆく。やがて、若者と馬は川を離れ、その家の方へ姿を消す。2人が姿を消すと、辺りは物音一つしない静寂の世界に包まれるのである。朝起きの早い農家は、この時刻にはもう寝てしまったように思える。この時の情景に強い印象を受けた作者は、後日これを想像図 (mental picture) として再現した。作者にとって、このような想像図を得ることが重要なのであり、これを得るために現地へ赴くのだと言えよう。

この土地の場合、何が原因で作者に強い印象を与えることになったのであろうか。その原因を分析することはまた、作者がその村で余生を送りたいと願った気持ちを、説明するであろう。まず、作者に与えられた自然環境に着目すると、時は夏の終わり、夕日が空を赤く染める日没時である。彼は川から吹いてくる微風を受けながら、川沿の曲りくねった細道を、自転車でゆっくりと下っている。やがて、川幅が広がり、水も淀む浅瀬にさしかかる。この浅瀬を挟み、手前には緩丘が連綿と続き、向こう岸には例の2〜3軒の農家と、それに付随する納屋等

が立ち並んでいる。この小村の主要建築物といえば、古い教会だけで、これは立派な鐘楼を有した堂々たる建物であった。この小村が夕日を浴びて、一層魅力的に見えたのは、次の引用文が明らかにしてくれるであろう。

Never, I thought, had I seen a lovelier village with its old picturesque cottages shaded by ancient oaks and elms, and the great church with its stately tower looking dark against the luminous western sky. Dismounting again I stood for some time admiring the scene, wishing that I could make that village home for the rest of my life, conscious at the same time that it was the mood, the season, the magical hour which made it seem so enchanting.¹

上記のことからわかるように、作者がこの村で余生を送りたいと願うほど魅惑されたのは、自然環境の美しさ故である。わずかに2～3軒の農家と教会から成る小村、色鮮やかな夕焼け空、川の浅瀬、あるいは緩丘など、自然の景観が醸し出す雰囲気陶醉したためである。このような自然環境に加えて、作者の印象を深くしたもう一つの要因は、人物の登場であろう。馬上の若者が予備の馬をもう一頭引き連れて、浅瀬に乗り入れるのであるが、これは野良仕事を終え、馬に水を飲ませるためである。四肢を冷やしながらかゆくりと、そしてたっぷり水を飲む馬、これを日課として繰り返す若者の家畜に寄せる思い遣り、彼等のこのような挙動を作者は愛情濃やかに観察する。やがて、例の主婦らしき人が現われ、西部訛の甲高い声で若者に呼びかける。恐らく、夕食時になっても戻らぬ息子を案じて、浅瀬まで迎えに来たのであろう。この場面は、自然の美しさに加えて、親子の情愛や、若者の家畜を思い遣る気持ちが相俟って、作者に忘れ得ぬ印象を与えたのに違いない。即ち、登場人物や動物もまた、作者を魅惑した重要な要因になっているのである。

作者がこの小村で余生を送りたいと願った理由は他にも考えられる。それは彼が Tamar 川を下った理由と密接な関連がある。前述の通り、この川はデヴォンシャー州とコーンウォール州の境界線に沿って南下し、Plymouthに注ぐ。そしてこのデヴォンシャーこそ、作者の祖先が幾世代にも渡って住んだ、忘れ得ぬ国であった。このエッセイ集において、この国を何度も扱っているのは、彼にとって格別の地であることを意味している。同州の Exe川をも訪れているが、この時には何にも増して愛着を感じ、感慨も一入であった。この Exe川こそ、彼の祖先が生まれ育った川であったからに他ならない。南米で生育

した作者は、恐らく幼少の頃から、この川のことを聞かされていたと思われる。さもないければ、次のような表現は生じ得ない筈である。

My forefathers had dwelt for generations beside it, listening all their lives long to its music, and when they left it they still loved it in exile, and died at last with its music in their ears. Nor did the connection end there; their children and children's children doubtless had some inherited memory of it; Or how came I to have this feeling, which made it sacred, and drew me to it? We inherited not from our ancestors only, but, through them, something, too, from the earth and place that knew them.²

この川の想い出は、異国にあってなお語り継がれていたことがわかるであろう。この幻の川を始めて見た時、上記の感慨となったのである。この川に対する感慨同様、先の Tamar 川や例の小村に対して、作者が感動を深くしたのは、このような郷土愛的な感情があったからに他ならない。そして、この郷土愛は後述する彼のセンチメントが導いているのであるが、本書のテーマになっている。

最後の要因としてあげられるのは、作者が自身を村人と考えていることである。渡英後の彼は、ロンドンで生活しながら、この都会を嫌い続けた。それは、彼が人為的な生活条件に束縛され、息苦しさを感じていたからであった。しかし、地方はそのような束縛から解放し、安堵感を与えてくれたのである。都会では失われた人情味が、田舎には未だ残っていたからである。そのような田舎の村人に数多く接した彼は、親類意識を感じて、自己を村人と宣言するに至る。“I am one of them, a villager with village mind, and no wish for any other.”³ これは1921年発表の *A Traveller in Little Things* からの引用であるから、厳密に言えば、本書発表時の1909年までに、自己を村人と見なす精神が確立していたか否か疑問ではある。しかし、宣言こそしていないけれども、作者が地方や村人を愛し続けた事実は、初期の作品から一貫している。本書においても彼は、“...our intimacy with the people has produced the sense of being one in blood with them.”⁴ と述べているが、これは村人との交友を通じて、彼が血縁意識を持っていることを意味する。このことから、本書は彼が「村の精神を有する村人」と宣言するに至る、過渡期の作品であると見なすことができる。従って、彼が Tamar 川辺の小村を理想の地と考えたにしても、自己を村人と見なす過渡的存在にあって

た以上、ごく自然な成り行きであった。

II Mitford 緑の地にて

作者は地方の小村へ出かけるが、文人緑の地に巡り合う場合がある。本書においては、Mary Mitford (1787—1855) や William Cobbet (1763—1835)、それに Robert Bloomfield (1766—1823) の緑の地に歩を運んでいる。3 人とも地方を描き、名声を博したわけだが、作者が訪れた当時は、もはやその作品は読まれなくなっていた。だが、彼はそれぞれの作品を通じて知り得た彼等を、弁護する態度をとっている。

作者は Reading から Basingstoke 間に横たわる、緑地や森林地を気に入っていた。復活祭に彼は友人と、その Reading から Three Mile Cross という村にやって来る。この村は Mitford が30年に渡って住んだ所であり、また創作活動を続けた所でもある。この村で作者は彼女の коттеジを発見するのであるが、時代の変化に抗し得ず、“Mitford Arms” とか、あるいは “Temperance Hotel” などの看板が掲げられ、お茶とパンを出してくれる休憩所が変わっていた。⁵ かつて美しい庭のあった所は、建物が密集し、昔の面影を失っていたのである。次に作者は彼女の記念碑のある Swallowfield という村にやって来る。“Mitford's monument is a plain, almost an ugly, granit cross, standing close to the wall, shaded by yew, elm, and beech trees...”⁶ と作者が述べていることから判断すれば、殆んど感銘しなかったことがわかる。Selborne 村にある Gilbert White の記念碑を発見した時の喜びと比べれば雲泥の差がある。彼の記念碑は小さく、半ば土中に埋もれ、伸び放題の雑草に覆われていた。これを、子供の顔を覗く時に額の髪を押し上げながら覗くように、覆い被さる雑草を払いながら、見守っている。しかも、ようやく探し当てた記念碑を、感慨深げに見守っているのである。⁷ このような気持を彼女の記念碑に対して抱けなかったのは、石碑そのものが醜いこともあったであろうが、安らかに眠る場所として、相応しいと思えなかったためであった。そこを去る時、作者は年老いた寺男に出合っているが、この男は彼女が死んだ時、10歳であった。彼女のことを記憶しており、“She was a very pleasant little woman.”と伝えている。⁸ 彼女を記憶している土地の他の人たちも、やはり同様に答えていることから、作者は彼女の肖像画がそのように見えないことを、画家の不器用さのせいにする。実際、作者たちが所有していた彼女の肖像画は、太って平凡な顔をした、少々下品な人物だったからである。彼女の作品か

ら判断して、作者はどうしてもそのような印象を持ち得なかったらしい。というのは、作者の女友達が1852年頃に鉛筆でスケッチしたものには “the refinement, the sweetness, the animation and charm” が見られるからである。⁹ どちらの絵が本物に近いのか判断しかねるが、Constance Hill 著の *Mary Russell Mitford* (1920) の口絵を見る限り、彼女はひきしまった、魅力的な顔に見える。この肖像画は1836年、A. Burt により画かれたものであるが、年齢よりずっと若く見える。1836年といえ、彼女は49歳のはずだが、とてもそうは見えない。大きな目、高い鼻、ひきしまった唇など、顔全体から凜凜しさが感じられる。衣装や髪形は凝っていて、洗練された若き貴婦人の印象を与える。¹⁰ 従って、この女流作家の容姿については、土地の人々の証言と、女友達からもらった鉛筆画の方に、信憑性があるように思われる。

作者は一度読んだ作品をよく記憶している。Mitford の *Our Village* (1824—32) もまた然りで、彼はこの散文の批評を試みている。もともとこの作品は1819年から *Lady's Magazine* に寄稿したもので、後に5巻本となったものである。*Sketches of Rural Character and Scenery* という副題が示す通り、この作品は地方の、特に彼女の周囲の人間や、自然を描いたものである。作者はこの作品を素朴で、自然であり、且つ作家自身の反映であると見なす。作家自身の反映とは、優しい温か味のある心、衝動的な性格、それに明るくユーモラスな精神を指す。だが、作者の批評には、この作品の弱点もまた含まれている。思想に欠けること、田舎を描写しながら観察が不十分なことがそれである。また、田舎の人物描写についても、他の作家と比べものにならない点、あるいは対話に不自然さのある点を指摘する。¹¹ 彼女の作品に作者の指摘通りの欠点があるとすれば、多作がその原因になってはいないだろうか。父親が勝負事に没頭し、家運が傾いたため、彼女は4歳の時、生まれた Alresford 村を去り、Reading へ移っている。¹² 以後、一家は転転と居を変えるが、彼女が物を書くようになってからは、一家の生計をたてねばならなくなった。書いた物はよく売れたから、勢い多作家となり、神経も擦り減ったものと思われる。この間の事情を知らずして、作者が批評しているわけではない。父親の Dr. Mitford が、金銭面において無関心でなければ、駄作も少なくともすんだらうと、残念に思っているのである。彼女の作品が大多数、野心作であったと思うが故に、悔んでいるのである。だが作品中で、主人公が Lizze という村の女の子を伴って、牧場へキバナノクリンザクラ (cowslip) を摘みに出かける場面を、作者は絶賛する。この場面には、先ず女流作家たる女が露顕されていると見なす。即ち、彼女の「優し

い生き生きした気質」が見られ、また、「地上のあらゆるものに存する、感興や喜びに対し、衝動と子供じみた感情」が見られると言うのである。¹³このことは作者の言う通り、彼女の長所なのであり、読者を惹きつける魅力であると思われる。彼女があらゆるものに存する喜びを見出すことは、読者をして、その対象に興味をもたせることを意味する。なんとすれば、作家が対象に興味を示さなければ、読者として興味を持てないからである。作者はまた、彼女が文学表現に個人的な魅力を与えることに成功した理由として、感情を表現する際に、技巧を用いたり、あるいはその感情を隠したりしなかったことをあげる。

以上の批評については、彼女の“The Cowslip ball”を読めば、即座に頷けることである。主人公の朝のメランコリックな気分が、牧場へ出かけて遊び、夕立にあって家に逃げ帰って来る時には、気分が一新されていたように、この章は読者の気分までも爽やかにしてくれる。仲良しの女の子を誘い、牧場へ出かける時の主人公の声は弾んで、躍動するが、その精神は読者にも即座に伝わってくる。この場面は、朝のメランコリックな気分と、牧場へ出かける時の陽気さが、あるいはユーモアとペーススのコントラストが示すように、作家の感情が微妙なことで起伏してゆく女心を示している。その感情を飾ることなく、衝動的に、リズムカルに表現するのが彼女の特質と言える。作者は他の作品においても、Mitfordをよく登場させ、その作品について言及している。しかも、彼女の数ある作品のなかから、*Our Village* の場合が殆んどである。ということは、それが作者の気に入りの作品であるからであろう。このことは作者が、わずかな時間を利用して読みたい本を手にする時、よくこの本を手にとると述べていることからわかるのである。¹⁴ もう一つ考えられる理由として、両作家の作風、及び境遇の類似性があげられよう。両者とも、地方の自然や人物に取材し、野草や動物に愛情を注ぐ態度が似ているからである。また、Mitfordの父が、美質を備えていたにもかかわらず、不注意で軽率な性格であったが故に、引起を繰り返さねばならなかったように、作者の父もまた善良で、おおらかな人であったが故に、やはり何度か引越を余儀なくされている。しかも、そのような父親に寄せる同情や愛情もまた、二者には類似性が見られるのである。

III Bloomfield 緑の地にて

作者は Mitford に加えた批評以上に、サフォーク州生まれの Bloomfield を、詳細に、力を込めて論じている。

春夏秋冬から成る長詩 *The Farmer's Boy* (1800) を、各季節ごとに批評している。作者はこれまでも、いろいろな作家の作品をとらえ、断片的な批評を加えたことはあった。しかし、彼が一人の作家に一章を割いて、批評したのは極めて稀な現象と言わねばならない。それだけに、彼がこの詩人を取りあげた理由を考えてみるのが、必要になるであろう。

作者が本書の取材にサフォーク州の Troston 村を訪れたのは、本書公刊(1909)の少し前と思われる。この村は、この詩人を見出し、彼のために出版者まで世話してくれた Capel Lofft の故郷でもある。だが、詩人の生誕地は、その村から2マイルほど離れた Honington という村である。この村を Little Duse という川が流れ、対岸には Sapiston 村がある。この Sapiston 村こそ、詩人に自然への愛を育み、農場での生活や仕事を教えた所で、詩作の背景をなす所であった。1800年、この詩が出版されると、3年以内に25~30版を重ねる売れゆきを示したのであった。だが、後年彼は書籍商に手を出し、失敗して貧困のうちに死んでいる。その詩は19世紀半ばまで読まれたが、Byronは笑い、Crabbeは不平を鳴らし、Charles Lambは見て胸がむかついたと言われる。¹⁵作者が訪れた当時は、もはやこの詩を読みたがる人はいなくなっていた。

作者がこの詩をとりあげ、これを批評の対象にした第一の理由は、作者自身の自然観と深く結びついている。青少年時代、彼の主な喜びは自然のなかにあった。本を開く時、それは自然について何かを見出すためであった。何かをとほ、自然によってわれわれのなかに甞される、ある感情表現のことである。彼にとって、書物におけると同様、自然の甞すそのような感情こそ、人生の最も重要なことであった。その感情を書物に求める時、散文よりも詩のなかに、多くの満足を見出したのであった。彼の文学趣味は、当時から、田舎の光景や物音を描く作品に、傾倒していたのである。¹⁶つまり、作者の読書傾向は、その自然観と結びついていたこと、そしてその自然観は青少年時代に確立していたのである。このことから、Mitfordの散文同様、Bloomfieldの詩もまた、彼の好みの作品であることが頷けるのである。

第二に、作者がこの詩をとりあげた理由は、その詩に対する想い出と、その詩が与える連想とに関係する。作者は、少年時代と思われるが、主都ヴェノス・アイレスを訪問した際、始めて古書店に立ち寄っている。そこで最初に掘り出した物は、Thomsonの*Seasons*であった。これが、彼が始めて買った本で、この時の経験を感動を込めて記している。何度かこの店を訪れているうちに、次に見出したのがイギリスの田園詩、*The Farmer's Boy*

であった。その当時、彼はその作家の若き日については何も知らなかったのだが、すぐ読んでみたい欲望に駆られている。この詩を読み、実際に入ったことは、彼の読書傾向からして、当然なことであった。¹⁷ 主都訪問自体、当時の彼にとっては稀な経験だったのに、古書店でのこの詩との出会いや、店の主人の好意的な態度は、よほど嬉しかったとみえ、彼はその時の想い出を印象深げに記している。この詩がイギリスの田園を謳ったということは、彼にとって、未だ見ぬ祖先の地の連想につながる。心の古里、しかも行って見ることはなからうと考えていたその国が、この詩によって、眼前に展開されたのである。これが後年、作者が詩の背景をなすその村を訪れた一因をなすのである。

作者は忘却されたこの詩に、保存価値を見出そうと努める。Thomson の *Seasons* や、Cowper の *Task* 等、優れた田園詩は数多くあるけれども、それらとは異質な特質を見出し、この詩を弁護しようとする。この詩は先ず Thomson などの自然詩に見られるように、自然を一般的に扱ったものではない。あるいは、*Task* に散見されるように、実際の光景を数限りなく、孤立して描写したものでない。あるいはまた、多くの短詩に見られるように、自然の特殊な光景や様相の、ある印象を伝えたものでないのである。彼の詩の場合は、辺鄙な農業地帯における、田舎の人間の辛い生活を、素朴に、一貫して、かなり完璧に説明したものである。しかも、詩人は生育地で、実体験したことを描いたから、そこには実感感が伴っている。この詩は、しかしながら、その実体験を即座に謳ったものではなく、それを遠くから振り返り、想い出のなかで再生した特徴を持つ。Wordsworth の例の言葉を借りるなら、「静かななかで、想い出される情緒」を謳ったものと見なすことができるのである。¹⁸ 作者はこの詩を決して完璧なものとして見ているわけではない。むしろ、時代の流れとともに廃れたその運命と、多くの弱点とを、見てとっている。しかしながら、その運命や弱点にもかかわらず、この詩の賞賛すべき描写句の多いことや、ユニークな特質を披瀝する。作者にとり、この詩ほど祖国の光景や生活を適切に、しかも広範に渡って、心的印象を与えてくれた詩はなかった。加えて、この詩は *Seasons* でさえ見られない、人間と動物の生活が自然との関連において、連続感を齎してくれるのである。このことは、作者がその詩から全光景を、人間と動物が自然と完全に調和した生活を、視覚化できたことを意味する。即ち、異国に居ながら作者が、一日中詩人とともに過ごすことができ、四季折々に繰り返される仕事を見ていることになる。従って、作者が、イギリスを離れてなお生家を夢見る人々にとって、この詩はある位置

を占めると考えたのも、無理のないことであった。作者が Honington で聞いた話によれば、当時詩人の生誕地を訪れた多くは、アメリカ人とのことであった。¹⁹ このような事実からしても、作者はこの詩の持つ意義や、その影響力に即して、何らかの位置を与えようとするのである。

詩そのものについて、作者の批評をもう少し述べてみよう。彼は春夏秋冬の順にこれを取りあげ、必要に応じて詩を引用するのであるが、詩人の心情を汲みながら、解説を施しているため、批評自体が非常に味わい深いものになっている。言わば鑑賞批評であり、読者に対して味わうべき箇所、その味わい方を教えた批評になっている。この詩に保存価値を見出そうとし、ある位置を与えようとする作者であるから、自然にこのような批評になったのであろう。「春」では、農場・百姓・親切で愛想のよい雇主・一組の雌牛・雌羊の群れなどが、登場する。そして、農地を耕し、種をまき、土を馬鍬で均す場面が、描写される。主人公の Giles 少年も登場するが、彼は気の優しい、父親のない、貧しい少年である。主人公の日課は、穀物を盗むカラスの見張りや、銃殺されたカラスを拾い集める仕事である。あるいはまた、朝の日の出とともに、畑に出かけ、雌牛を連れ帰ることであった。「春」で作者が注目しているのは、主人公が牛や羊を見る時の観察の正確さである。子羊の群れが、小丘で戯れて、互いに挑み合っている場面は、生き生きして美しい。しかし、この戯れの時期は長く続かない。主人公は、やがて殺し屋の食肉業者がやって来て、これら子羊を買取ってゆくのを、目にするのである。そこに読者は主人公の悲しみと、憤りの叫び声を聞くのであり、そのショッキングな姿を忘れ去る以外、どうすることもできない主人公の無力さと、苦悩を、感じとるのである。²⁰

「夏」において見るべきところは、農場での光景や出来事の描写である。しかもその場合、主人公がそこで主役を演じる時である。例えば、主人公が熟した穀物を荒らす何千羽ものスズメを、ブラン竿で脅す場面、あるいは疲労と暑さのために、茂みの陰で寝そべりながら、付近のカブト虫や空中のヒバリを観察する場面などが、そうである。スズメが陽気に囀りながら、イバラの迷路から一羽、また一羽と、頭を下げた穀物に飛び移る描写には、この鳥の仕種さや習性が適格に表現され、微笑ましい描写になっている。「秋」においては、作者は先ず豚の習性を取りあげる。秋の疾風で、ドングリが落下すると、雌豚は子供を連れて、これを漁りに来る。小池に近づき、警戒心の強い野ガモに、突然叫びたてられ、一日散に逃げる様子は滑稽である。馬よりも知性があると思われる豚が、敵の姿もろくに確認せず、遁走し続けるのだ

から愉快である。しかし、作者は豚の、この不都合とも思える性質は、何千年となく親から受け継がれたものであるとし、人間に飼われてなおその性質を失わないことを、冷静にとらえている。野ガモについても、外敵に侵入されると、身を起こしてはばたき、異常な叫び声を発するものだと述べる。このように、動物や鳥類が危険に晒された時に見られる習性を、詩を鑑賞しながら伝える作者の態度には、博物学者のそれがある。次に作者が注目すべき節としてあげるのは、主人公が小屋を建て、ミヤマガラスの見張りをする場面である。冬麦の種を播くと、見張り役は主人公である。彼は突風と、絶え間ない雨から身を守るため、小屋を建てる。夜になり、彼は約束してある友人たちを迎えるため、リンボクの実を焼き、座席用に青々とした芝生を敷き、炬床をきれいにしておいて待つ。しかし、待てど客人は遂に姿を現わさず、絶望する。酒宴の予想が怒りへ変わりゆく、少年の心理変化を、詩人は描いているのである。この些細なことから、主人公の小屋のある畑が、牢獄と化し、それと同時に、主人公の拘束感が無限に拡大してゆく過程を、作者は注目する。²¹

「冬」は四季の描写のなかでもベストであると作者は言う。ここでは人間に酷使される家畜が描かれており、その家畜に寄せる少年の同情心を謳っている。特に、駅馬として使用される馬の場合は悲惨である。人間を運ぶために利用され、しかも鞭打たれて血を流し、食料も休息もろくに与えられず、翌日再び仕事に駆り出されるのである。そこには、人間が残酷なほど家畜を酷使する姿がある。作者も言うように、この残酷な行為に対して、詩人の抵抗は小さなものかもしれない。だが、作者はこの詩人の家畜に寄せる同情や、優しい愛情の点で、同時代の詩人のなかでは最高度の表現になっていると見なし、高い評価を与えているのである。²²

IV センチメント考

作者がデヴォンシャのある小村に、余生を送りたいほど魅力を感じたり、あるいは同州の Exe川に愛着したことについては既に述べた。祖国を後にし、海外に移住した人々には、作者のみならず、祖国に寄せる共通の想いが見られる。先のアメリカ人による Bloomfield の生誕地誌でも、その一例である。作者は “The Return of the Native” という一章を設けて、祖国イギリスを後にした一家が、遠くオーストラリアにおいて、遙かな国の郷里を想う気持ちを描いている。作者はロンドンへ向かう列車のなかで、途中から乗り込んできたある男と話す機会を

得る。その男から聞いた体験談を、彼は上記のタイトルのもとに纏めたのであった。

この男が3歳の時、父親は祖父から受け継いだ農家を手放している。わずかばかりの農場があったが、生計を立てるには不十分だったため、父親は一家を連れ、オーストラリアに移住した。しかし、9歳の時、父親は死亡し、一家は異国で辛酸をなめる。やがて、幸運にも彼等は生活に余裕を生じるに至り、兄弟や姉妹はオーストラリア人になりきって、その国をこの世で最善と思うようになった。ところが、この男だけは、他の兄弟と違って、異国を安住の地と見なすことができなかった。この相違が彼を母国に呼び戻す大きな原因になったと思われる。彼が異国で仕事に成功したにもかかわらず、そこに安らぎを見出せなかった理由は何であったか。これには、父親の望郷の念が大いに影響を与えている。彼は生前、夕方になると子供たちに囲まれて、故郷の話をするのを何よりの楽しみにしていた。父親の郷愁がそうさせたのであるが、この男は繰り返し語られる故郷の話に、いつしか父親と同じ感情を抱くようになった。これが異国に安住の地を見出せなかった最大の理由になっている。大人になっても、この感情は消えることなく、故郷は絶えず彼を呼び続けるのである。そのため、彼は遂に余生を慎ましく過ごすに十分な資金を持ち、帰国したのである。そこには父から聞いた故郷の小川、村、古い石造りの教会、とりわけ、蔦の絡まる古い生家見たさの一念があった。さて、この男は無事生家を発見できたであろうか。あるいは、郷里に帰って満足したであろうか。

この男はハンムプシュ出身であり、父から聞いた同州の Thorpe 村を郷里と思い、そこへ出かけている。ロンドン到着後、先ず夢にまで描いたわが村を、わが家を、その目で確かめたい一心で、その村へやって来たのである。だが、そこにはそれらしい家も、農場も見当たらなかった。Dyson という自分の名字を頼りに、同姓の家を探してみたが、無駄であった。彼は昔の古い家は取り壊され、果樹園や垣根も掘り起こされて、跡形もなくなってしまったと思い、失望する。自分の足で探すことに限界を感じた彼は、村の古老に生家の所在を聞く。その手段は的中した。彼の記憶は間違っていたのである。ある古老に聞いたところ、彼の生家は Harping 教区内の Woodyates という所であった。彼はそこから2マイルも離れた Thorpe 村で、生家を探していたのである。幸運なことに、Woodyates の古い家は、幼い頃過ぎた時と同じ姿で残っていた。しかも、その所有者が家屋敷を手放したがっている話を聞き、彼はこれを買戻すことにしたのであった。

海外移住者のなかには、作者の祖先のみならず、イギ

リスを祖国とする人々が多い筈である。しかし、この男の場合に見られるように、子孫が祖先の家屋敷を発見できる例は、ごく稀なことと思われる。それにもかかわらず、この男と同じ想いや感情を抱いて、海外から祖国を訪れる人は後を絶たない。それは心の問題だからであり、センチメントの問題であるからだ、作者は考える。*The Land's End* (1908) というエッセイ集においても、多くの観光客や、巡礼者たちが「地の果」詣でをする場面が見られるが、これもやはり、センチメントの問題として、作者は捉えている。そこで、彼の言うセンチメントという意義を明確にしておく必要が生じてくる。その場合のセンチメントとは、単なる感情という意味とは異なり、過去に刻まれた思い出や記憶が、死ぬまで生き続け、時として強い欲望になって現われる感情である。本国を去った移住者が望郷の念を抱くのも、あるいはイギリス内外から多くの人々が「地の果」詣でをするのも、この感情の発露と見てよい。幼い頃に種を播かれたこのセンチメントは、いつしか古の精神的財産となり、他人に譲渡したり、あるいは失うことのできない家宝となる性質を持っている。従って、それは遠い先祖から何百何千年となく継承されてきた家宝なのであり、これを継承した者の人生の一部を、形成する性質をも有する。²³ 言わば、それは祖先から子孫代に語り継がれた精神的遺産ということになろう。ところで、このようなセンチメントを抱いて、一体何の価値があるのかという疑問が生じるかもしれない。その価値については、作者はこれを肯定する立場をとる。センチメントのみならず、幻想も、そして受け継がねばならない伝統やロマンスや夢も、もしも奪われることになれば、心の貧しい人間になってしまうだろうと考えるからである。²⁴ 確かに、夢やセンチメントを抱いて、一生を送れる人は豊かな感性に恵まれた人に違いない。このセンチメントという用語は、作者が過去を振り返る時しばしば用いられる言葉であり、それが連想や思い出と関連して、作品に彼特有の風趣を添えてくれるのである。その風趣はイメージを伴ったものであるから、読者の脳裡に生き生きと映像化されるのである。本章においては、このセンチメントが、人間にどんな影響を与え、またどんな行動をとらせたか例示している。結果から言えば、例の男は長年の夢を実現できた稀有な人間だったと言えるのである。

V 作者のセンチメント——結語

本書 *Afoot in England* はその題名の示す通り、作者がイギリスを散策して得た印象を記したものである。

この点から見て、従来のエッセイ創作の態度と何ら変化はない。地方の片田舎に取材し、彼等の日常生活やその自然を、あるいはそこで見聞した話を語る方法も、何ら変わってはいない。だからと言って、この作品に見るべきものがないと考えるのは早計であろう。生涯に渡り、彼の友人であった Morley Roberts は、この作品に春の新芽の如き活力を認め、更に次のように評した。

It is full to the brim of his intense passion for England, England untouched and undefiled in her green spaces. Many have explained Greater Britain to England, but who like Hudson has explained England itself? His sense of life in this country and his passionate desire that what is beautiful should remain beautiful, and that all that is ugly and of ill repute should pass away, are what has drawn and will draw English hearts to him. The book has the qualities which came from a naturalist's freedom after being long pent in London's prison.²⁵

「緑なす空間の、触れられていない、よごれのないイギリス」とは、勿論大都会を言っているのではなく、地方の片田舎や、自然を指しているのである。そのような忘れ去られた地方を、彼が情熱を傾けて描いた事実は、何人も否定できないであろう。地方の人々の悲喜劇に接したり、彼等の親切的な持成に触れて、彼は感じたことをそのまま表現した。その表現には、人間性の回復を求めた彼の人生観も、また、自然は自然の手の中という自然保護の要求も、確かに認められる。作者の対象を見る目が、博物学者のそれであることは、自然観察の場合だけではなく、Bloomfield や, Mitford の作品批評の場合にも当て嵌まることである。Roberts の批評の特徴は、作家の若々しい文体と情熱を認めたことにある。1909年の作品発表といえば、作者は68歳であり、年齢としては決して若いとは言えない。しかも、年金を得たといっても、決して楽な生活をしていただけでもない。また作品自体にしても、いろいろな編集者から何度も断られた学句の出版であった。このような背景をもつ作品に、若々しさと情熱があるとすれば、恐らくそれは、ロンドンという牢獄から抜け出た時の喜びと、解放感のためであろう。この時の散策には妻 Emily を伴っていることがわかるのであるが、わずかなばかりの金銭的余裕が2人の遠出を可能にしたのであろう。しかし、旅館やホテルに宿泊する余裕はなかったとみえ、2人が民家に一夜の宿を求めて彷徨う姿がしばしば見られる。そして、ようやく探し当てた喜びや、その家で聞く悲喜劇や、一家の持成

心を込めて再現したのである。

このエッセイ集は、その対象に地方の人々や、自然や鳥類を従来通り登場させてはいるが、見逃してならないのは作者自身にかかわるセンチメントの問題である。つまり、対象そのものは *The Land's End* や *Hampshire Days* (1903) を踏襲しつつ、他方においてセンチメントという、人間の内面性を潜在させた作品と見ることができる。センチメントについては、既に例の男の帰郷の話で述べたが、これはまた作者自身にかかわる問題でもあった。この作品を読む時、この問題を看過すれば、興味も半減してしまうであろう。それほど作者自身の抱くセンチメントは重要と思われるのだが、Roberts の批評のなかには一言も触れられていない。彼のみならず、Robert Hamilton も、John Frederic も触れていないのである。ただし、Richard Haymaker が、この作品を評して、「若い時分に、心眼に形作ったイギリスを探して」作者が地方に出かけたことを述べている。²⁶ その理由までは説明していないし、センチメントの問題としてとらえたわけでもない。けれども、これは大いに注目すべきことである。なぜならば、このエッセイ集、特に本作品に始めて発表された幾編かのエッセイの根底を流れているのは、作者のセンチメントだからである。そのセンチメントは南米時代の比較的若い時期から形成され、それが Haymaker の指摘したように、心眼に形作られたものと思われる。このことは、第1章で触れた作者の Exe 川に寄せる感慨が証明している。その引用文に示されている通り、作者は幼い頃から父祖の、その川に寄せる想い出を、父から受け継いでいる。その想い出や、父祖の育ったその土地が、彼をその場所へ呼んだのである。換言すれば、彼は漫然とデヴォンを訪れたのではなく、センチメントがその地に導いたのである。

Bloomfield の詩もまた、作者のセンチメントに大に関係する。生国アルゼンチンで、父祖の郷里や、彼等から受け継がれた想い出を、確認させ、再現させてくれるものを、求めていたと思われるからである。彼の詩はその一例であるが、それは直接に父祖の郷里を謳ったものではなかった。しかし、サフォクの一農村を通じて、あるいはその村での農村生活を通じて、父祖の郷里の連想を呼ぶに十分役立った筈である。作者がもはや忘れ去られたその詩に、ある位置を与えようとして、保存価値を見出そうと努力したのも、このような背景があったからであろう。このことは Thomson の *Seasons* についても当て嵌まるであろう。彼の作品を通じて、作者は心眼に形成された父祖の国のイメージを、確認できたと思われるからである。両親の死後、作者が Ebro 号に乗船し、生国を後にしたのは1874年4月1日のことであった。

Ruth Tomalin によれば、幼年時代から聞きなれていた父祖の故郷の、幾つかの地名や川の名を、心に抱きつつ航海したにちがいないと述べている。²⁷ その年の5月3日に彼は Southampton 港に着いたのであった。

作者がこの作品にセンチメントを反映させたと思われる理由は他にもある。しかも、それは父祖の国イギリスに対してのみならず、作者の生国アルゼンチンに対してもそうなのである。1874年に渡英後、彼は1900年に59歳で英国国籍を取得している。この間、一度も帰国したことはなく、それは一生続いたのであった。兄弟や姉妹の死を悲しむことはあっても、遂に帰国の機会を得ることはなかった。それだけに、何かと面倒を見、可愛がっていた妹 Mary の、一人娘 Laura が日本人(Yoshio Shinya)と結婚し、1909年ロンドンを2人で訪れた時の喜びよりは、大変なものであつたらしい。²⁸ 生国に寄せる想いは1918年発表の *Far Away and Long Ago* となって開花する。当時作者は、渡英後44年も経過し、77歳にもなっていたから、遠い国に遙かな想いを寄せて描いたのである。作者のセンチメントが、それまでイギリス志向であったが、44年の時間の経過はこれを逆転させるのである。本作品には、その逆転志向の芽ばえがわずかながら見られる。“By Swallowfield”冒頭に述べてあるように、森林地や平地に郷愁の念を抱く場面がそうである。あるいは、南ウィルトシャの丘陵地や、ケンブリッジやイースト・アングリアの平地などもそうで、これらはいずれもアルゼンチンのパンパスを想起させるからである。“Roman Calleva”においても、古代の遺物を見て、生国の先住民族に想いを馳せている。あるいはまた、“In Praise of the Cow”において、子牛が生まれて二、三日後に連れ去ると、親牛は昼夜鳴き続けるという話を聞いて、生国で経験した話を想い出している。生国での自然環境や、生活経験に類似したものを、イギリスに求めた彼は、年を経るにつれて、今度は逆に同様のものを生国に求めてゆくのである。即ち、イギリスで観察される自然や生活のなかに、生国との類似性を発見し、遠い過去を懐かしむ傾向が出てくるのである。しかし、この両志向は相反するように見えて、実は彼のセンチメントを中心に据えて考えれば、矛盾してはいない。父祖の国へ想いを馳せて渡英したが、老齢になるにつれ、生国を懐かしむ気持は一体のものだからである。本作品には、このように、イギリスを求める気持が強力に反映されている反面、生国に寄せる想いもまた芽ばえている点に注目しなければならない。

Notes

¹ W. H. Hudson, *Afoot in England* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 16.

² Ibid., p. 265.

³ W. H. Hudson, *A Traveller in Little Things* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 246.

⁴ *Afoot in England*, p. 171.

⁵ Ibid., p. 69.

⁶ Ibid., p. 70.

⁷ W. H. Hudson, *Birds and Man* (London: Longmans, Green, and Co., 1901), p. 298.

⁸ *Afoot in England*, p. 70.

⁹ Ibid., p. 71.

¹⁰ A. Burt, Frontispiece, *Mary Russell Mitford* by Constance Hill (N. Y.: John Lane, 1920), p. ii.

¹¹ *Afoot in England*, p. 73.

¹² Constance Hill, *Mary Russell Mitford and Her Surroundings* (London: John Lane, 1920), pp. 22-23.

¹³ *Afoot in England*, pp. 74-75.

¹⁴ Ibid., p. 75.

¹⁵ Ibid., p. 271.

¹⁶ Ibid., pp. 272-73.

¹⁷ Ibid., p. 274.

¹⁸ Ibid., pp. 276-77.

¹⁹ Ibid., p. 279.

²⁰ Ibid., pp. 279-82.

²¹ Ibid., pp. 282-87.

²² Ibid., pp. 289-91.

²³ W. H. Hudson, *The Land's End* in *The Collected Works of W. H. Hudson* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1923), p. 292.

²⁴ Ibid., p. 299.

²⁵ Morley Roberts, *W. H. Hudson: A Portrait* (London: Eveleigh Nash & Grayson, 1924), p. 155.

²⁶ Richard E. Haymaker, *From Pampas to Hedge-rows and Downs* (N. Y.: Bookman Associates, 1954), p. 122.

²⁷ Ruth Tomalin, *W. H. Hudson: A Biography* (London: Faber & Faber, 1982), p. 101.

²⁸ 津田正夫 「W. H. Hudson について」『語学教育』No. 275 (昭和41年), pp. 5-14.